

## 『長谷川誠三—津軽の先駆者の 信仰と事績』を出版して その2

岡部 一興

### 6. 社会貢献する長谷川誠三

#### 社会事業 本郷定次郎「暁星園」

1866年(慶応2年11月2日)12月8日~1899(明治32)年5月18日死去。1888年本郷定次郎はジョージ・ミュラーの影響で、孤児院事業に興味を持ち勤めながら孤児を養育。十分な孤児教育ができないとみるや通信省を辞め、赤坂氷川町で施療事業をし、『聖書の友』を発行してW.N.ホイットニーに支援を受けながら孤児の救済を行なった。この頃、長谷川はサポーターの一人になった。92(明治25)年4月那須野原青木開墾地に4町5反歩の土地を得て70名も収容する孤児院施設「暁星園」を開設したが、99年5月18日死去。その後夫妻と親交のあった角倉嵯峨子が継ぎ、横浜孤児院と改称、1900年児童の増加に伴い財団法人に改組、横浜の南太田庚耕地800坪を無料で借受け新院舎を建設、翌年6月渡辺たま子を院長に据えた。(現横浜三春園)

#### 本間俊平—感化教育に励む

誠三は、勤労しつつ感化教育に勤しむ本間俊平と弘前で出会う。俊平は大工の徒弟、18歳の頃押川方義、植村正久らのキリスト教演説会を妨害。23歳の時奥江清之助と出会い、97(明治30)年霊南坂教会で留岡幸助より受洗。秋吉台で大理石を発掘、出獄人を雇い経営に励んだ。1912(大正元)年芝浦製作所と配電盤に大理石を使用する取引をするようになり、ここから赤字であった経営が安定、経営が安定するまでの時を長谷川が資金援助した。

#### 小作料を値上げしない長谷川誠三

1902(明治35)年東北に凶作が襲い、1904年2月10日ロシアに宣戦布告、戦争を契機に租税の重税化が進む。明治20年代自作地69.6%、小作地30.4%、明治34年自作地41.3%、小作地58.7%と小作地が急上昇。誠三は『東奥日報』に「地主諸君に議る一時局に際して」と題し2回にわたって論じた。政府による租税の重税を批判、地主は自分の利益を今まで通り確保したので、小作料が上げ

られ小作人はさらに苦しんだ。誠三は租税を上げる前の料率にしたので、小作人からは大歓迎されたが、まわりの地主から攻撃された。

#### 凶作慰問伝道

1913(大正2)年東北、北海道が大凶作。「近年稀有野大惨事にして稲は平年の2分作」青森県下で救済すべき窮民は、戸数15,600戸、救済人数80,443人に達した。天明年間の大凶作に匹敵するものであった。

政府、県当局は産業資金100万円の県債を起こし、政府から76万円の提供を受けたが、焼け石に水。弘前教会は「青森県凶作救済会」を立ち上げた。誠三は、この惨状を見て炊き出しをしたが、多くの窮民を救うことができなかった。そこで、長谷川は横浜太田町の米穀商鈴木弁蔵を介して、時価にして20万円、貨車50両の外米を買い求めて窮民を救った。1914年2月より慰問伝道を開始、各地で浅田又三郎が福音講演会を開いては、出席者に米2升、3升を袋に入れて配った。凶作慰問伝道の本部は藤崎銀行。長谷川所有の10棟ほどの倉庫に米を収納。『福音時報慰問号』に浅田又三郎が長谷川の行為を次のように書いている。「其愛隣同情の念の依て生じたる原因は更に深く其心キリストの愛に励まされたるの由れる」、キリストの愛に励まされての行為であった。

### 7. メソジスト派からプリマス・プレズレンへ

藤崎教会にも弘前女学校にも欠くことのできない重責を果たしてきた誠三が、メソジスト派から一教派のプリマス・プレズレンに転じたことであった。この派は、1943年頃J.N.ダービー牧師が英国教会から離れた集団でイギリス南西部の港町プリマスにおいて起った。1888(明治21)年秋、H.G.ブランド(Brand, Harverd George)がケンブリッジ大学卒業、1年後自給伝道者として来日。来日して間もなく、日本橋倶楽部を運営していた日本橋教会の青年たちが、同教会の北原義道牧師の息子が盗癖から退学処分を受けたのを隠蔽したとして、日本橋教会を離脱。そのメンバーは星野天知、平田禿木らの文学界の人たちが中心だった。日本橋倶楽部のある青年が洗礼を受けたいということ、洗礼を引受ける教会を探していたが、どの教

会も教会に来れば洗礼を受けるが、日本橋倶楽部の道場では洗礼を受けないということで困っていた。そこで浅草教会の松田亀吉長老に相談、松田の知り合いの鈴木鉦二郎の仲介でブランドを紹介され、日本橋倶楽部の道場で洗礼を受けた。これを契機に、89年から91年にかけて日本橋教会では、71名の信者がプリマス派に離脱する事件が起こった。北原義道の後、明治学院神学部の乗松雅休が日本橋教会に説教で来ていた。このような離脱のなかで、それを食い止めるために選ばれた勧告委員の浅田喜三郎もこの派に離脱してしまった。乗松は浅田家に出向いて脱会しないように説得したが、逆に乗松の心が主に啓かれ「あなたの方が本当だ」と告白、乗松は「まず神の国と神の義とを求めよ」（マタイ6：3）の御言葉が与えられて決心、ブランドを訪ねこの派に加わった。また同じ明治学院神学部で海岸教会の会員であった首藤新蔵もプリマス派に移った。

プリマス派の影響を受けた教会を見ると、日本基督教会系では日本橋教会の外に、浅草教会、明星教会、本所教会、桜田教会、本郷教会、下谷教会、海岸教会、上田教会、桐生教会、組合教会では島之内教会、メソジスト教会では、盛岡教会と藤崎教会の一部の会員、長老などの役員がこの派に離脱した。長谷川は、盛岡教会の牧師平野栄太郎とともに、1906（明治39）年9月離脱、盛岡では、64名の会員中、28名が離脱、長谷川が所属する藤崎教会では13名が離脱した。

### プリマス派の信仰

ではプリマス派の信仰についてみて見たい。プリマス派の提起したものは、高度な難解な神学というより、全てを主にゆだねる「ナザレのイエスの素朴な福音」を信ずる信仰であった。現在この派はキリスト同信会と言って教会の制度や組織を排する一方、特定な教義や信条を持たず、伝道師はいるが牧師を置かず、聖書を唯一のものとし、聖霊に導かれるままに礼拝し、毎週聖餐式を行ない、教理上はカルヴァン主義と言われる。万人祭司という立場を取り、主のもとに集まるべきということから、制度教会では牧師や伝道師を先生と呼ぶが、お互いをブレズレンという立場から伝道者と信徒との区別がない。また礼拝を重視、信者であれば礼拝の御言葉を語れる。礼拝献金は捧げるが牧師の謝儀になる月定献金は集めない。その点では、伝道者は自らの糧を稼がなければならないという厳しさがある。

長谷川誠三が所属していたメソジスト教会では、牧師依存、牧師中心主義で教職の最上位に監督がいる。監督は人事権を有し、2年ないし3年

経つと牧師が入れ替わる。すべ上からの命令で動く。長谷川や平野は、メソジスト教会に特徴的な監督制度に疑問を持っていたのではないかと考えられる。誠三は、そうした万人祭司を徹底させる信仰の群れを見た時に、これこそが自分が求めていたキリスト教ではないかと思ったのではないか。長年藤崎教会で教会に仕えてきたが、プリマス派の人たちと交わりを持つうちに、福音に魅せられて離脱していったのではないかと思われる。日本基督教会の植村正久は、プリマス派の人たちを「羊泥棒」といって嫌い、伝道しないで教会荒しをするとんでもない群れであると言った。しかし、この派は路傍伝道をし、トラクトを配って文書伝道をし、教会員の献金に依存せず働きながら伝道する。プリマス派の人たちが、実に熱心に聖書を読み、時に他の教会の伝道師も太刀打ちできないほどであった。前述した乗松も首藤もプリマス派の信徒と話しているうちに「あなたの方が本当だ」と言わしめるように実に聖書を読み込んでいた。

長谷川は離脱する前に本多庸一に会って、プリマス派へ移ることを打ち明けている。1906年6月上京し、青山を訪ね信仰上の問題を打ち明けた。この後、同年6月27日付と11月19日書簡を本多からもらっている。6月の書簡ではプリマス派の人たちは、「真面目にして厳格に道を守ることは小生も窃かに感服する」と感心すると述べた後、プリマス派は「偏狭の態度」を持ち、「組織ある教派を嫌悪」、「殆ど其破壊を希望するがごとく」と酷評している。そして、所属の教会を脱してプリマス派に移るのは理解できないと述べ、誠三に美以教会にとどまり、神秘なる厳格な信仰を保ちつつ改革していくことが大切であると説いている。長谷川の進退は、藤崎教会はもとより美以教会全体に、そして弘前女学校にとって大きな影響を与える問題であると述べ、注意を促している。

1906年11月書簡では、本多がメソジストの三派合同を成立させ、同年10月30日に帰国、早々に出したものである。長谷川が離脱したことを知って、意外であったらしく本多の動揺がうかがえる手紙となっている。今後の弘前女学校の経営について憂い、また彼の信仰上の問題について注意を与え、新しい宗派で新しい信徒を開拓し、教勢拡大に努めてほしいと述べている。

1907年5月、長谷川は自邸の敷地に教会堂を建て、そのわきに住居を建て、5年ほど浅田又三郎が移り住んだ。ここに主のテーブルが置かれた。主のテーブルが置かれたということは、「パン裂き」（聖餐式）が執行される意味で、主の晩餐を中心に交わりが生まれたという理解で、教会が成立し

たことを言う。礼拝は中央に聖餐台のテーブルがあり、それを囲むようにして席があり、講壇はない。大人の集会は日曜日と水曜日、子供の孫を中心に日曜学校を開いた。

### 最後に

長谷川は数々の事業を成功させ、1913（大正2）年東北、北海道の大凶作の時、凶作慰問伝道を行ない多くの人々を救い、寄付や慈善活動を行なった。自らの行為を誇らず、名誉欲に走ることなく、世の権威におもねることなく、節制に務め、事業で獲得した利益は蓄積することなく、社会のため人のために還元し惜しみなく使った。彼の事業家としての歩みは非凡なものがあったが、後継者に恵まれないところがあった。そのため彼の事業は倒産や合併の憂き目にあった。

長谷川は、プリマス派の伝道者首藤新蔵をはじめとする伝道者の出会いを通して、プリマス派の信仰の神髄に心が揺さぶられた。彼が万人祭司を徹底させる群れの信仰を見た時に、これこそが自分が求めていたキリスト教であると考えようになったと思われる。彼は、藤崎教会を退会するにあたり、「単純に主イエス・キリストの御名にまで集められた結果全く弘前女学校をも同時にその関係を断ち純粋に主のものとなりたれば」という文書を残し、メソジスト教会を離脱、自宅に礼拝堂を備え主の導きによる信仰生活をしたのであった。

※この要旨を書くに当たっては、『長谷川誠三一津軽の先駆者の信仰と事績』教文館、2019年に出版した書を参考にして書いた。

---

## 戦前のキリスト教主義学校に存在した 2つの幼稚園とその保育者たち —海岸女学校附属幼稚園と青山学院緑岡幼 稚園における幼児教育—

中村 早苗

### 〈はじめに〉

現在の青山学院幼稚園は1961年に設置されたが、青山学院には過去に海岸女学校附属幼稚園（1893～1899年。以下「海岸女学校幼稚園」）と青山学院緑岡幼稚園（1937～1944年。以下「緑岡幼稚園」）が存在した。発表者は学院の年史編纂に携わり2つの幼稚園について疑問に感じた以下の2点がこの研究の動機である。

第1の疑問は、なぜ両幼稚園は閉園を余儀なくされ学院は速やかに幼稚園を再開しなかったのかである。次に、学院の保育者養成は戦後に始まっ

たので両幼稚園には学外の養成機関で学んだ保育者が招かれた。海岸女学校幼稚園の高野あいと濱田梅、緑岡幼稚園の田村忠子である。濱田、田村は海岸女学校（青山女学院）の卒業生だが、高野については「プレスビテリアン派からわが宗派に移り、はるばる大阪から招かれた」という記述しかなく、なぜ他教派の高野を招いたのか、高野はどの養成機関で教育を受けたのかが第2の疑問である。

青山学院は米国のメソジスト監督派教会の宣教師を中心に創立された「女子小学校」（1874年）、「耕教学舎」（1878年）、横浜で開校した「美會神学校」（1879年）の3校を源流としている。創立の起源とする「女子小学校」は米国のメソジスト監督派教会女性海外伝道協会（The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church 以下、WFMS）の宣教師ドーラ・スクーンメーカーが津田仙の協力を得て東京・麻布で開校、後に築地居留地に移り海岸女学校となる。その校内で始められたのが海岸女学校幼稚園である。緑岡幼稚園は校友である米山梅吉の寄付により創立された緑岡小学校と共に米山の妻・はるによって設置された。

### 〈海岸女学校幼稚園の高野あい・濱田梅子〉

『青山女学院史』には「WFMSの教育事業の一つとして幼稚園が開かれたのは明治25年10月のことで、（中略）プレスビテリアン派からわが宗派に移り、はるばる大阪から招かれた高野あいを責任者として、築地の海岸女学校内に、僅か2人の園児をもって開園したのである。1人はクリスチャンの書店の息子、ほかの1人は商人の娘で、4才と3才の子どもであった」とあり、出典は、*Heathen Woman's Friend* 1895年7月号の高野による、THE TOKIO KINDERGATEN.という記事である。齋藤元子によれば、同誌はWFMSの機関誌であり、内容は3つの柱によって構成され、第1は女性宣教師からの報告を中心とした伝道地に関する記事、第2は各支部の報告などアメリカ国内の活動に関する記事、第3は献金状況や会計収支などの報告である。WFMSの海外での活動はアメリカ国内各支部の献金によって支えられていたので機関誌は海外の伝道地において献金がどのように役立っているかをアメリカの女性たちに伝える重要な役目を果たしていた。

高野がキリスト教の養成機関で学んだとすれば、東京の桜井女学校幼稚保育科（1884年設立）または神戸の頌栄保姆伝習所（1889年設立）と考えられ、桜井女学校の1887年の卒業式プログラムの中に高野愛子の名前がある。また、1893年10月

7日『護教』には「海岸女学校にて従前の学科外に幼稚園を設け去る10月2日より開園したり保母ハ曾て北海道にありてこの道に経験する某女史なり」とあり、札幌のスミス女学校（現北星学園）幼稚園の保育者とも考えられ、『北星学園八十年誌稿』の「創立以来の教職員氏名」欄において「明治24年に就職した高野愛子」という保母の存在が確認できる。小林恵子も「ミス・ミリケンの教育を受けた桜井女学校幼稚保育科の卒業生をと願うミス・スミスの要望は、長谷部が2年間の勤務で退職したあと、富田さんが保母となり、ついで高野愛子が1894（明治27）年6月の幼稚園閉鎖に至るまで保母を勤めた」と記述している。

さらに、*Heathen Woman's Friend* 1895年1月号のA MISSIONARY KINDERGARTENER. において高野は自身について詳細に記述している。広島に生まれ、クリスチヤンの家庭で育ち、母は教育に大変熱心だった。友人の病のために大阪に滞在中のミセス・ツールに預けられ、1883年冬に東京の桜井女学校での生活を始め、幼稚園の子どもたちとよく遊んだ。ミス・ミリケンは幼稚園で教えていたが高野は彼女の英語のクラスの生徒だった。1886年9月、ミス・ミリケンの勧めで高野は友人と共に保育の勉強をすることを決め、卒業までの1年間も幼稚園を手伝った。1889年春academy最後の年にミス・ミリケンの助手として越後の高田で働き、1889年秋に東京に戻ってCollegiate departmentで学んだ。1891年7月に卒業、札幌へ行き2年間幼稚園で働いた。1893年9月に（東京へ一筆者註）戻り、初めて一人で（海岸女学校で一筆者註）働くことになった。

海岸女学校は幼稚園開園の翌年の地震によって築地の校舎が全壊、青山の東京英和女学校と統合して翌年には青山女学院と改称した。幼稚園名も東京英和女学校附属幼稚園から青山女学院附属幼稚園へと改称した。幼稚園は仮校舎である民家の一階で始められ、1898年には構内にクラドン・ホールが完成したのでその一階に移った。『青山女学院史』の「青山へ移ってからの幼稚園は内容の点で面目を一新し、わが国における本格的幼児教育の先駆的な存在であったといえよう」との記述は卒業生である濱田梅子の存在を示している。濱田は海岸女学校卒業後に婦人伝道師となり、1888年に宣教師コールバックを助けて米沢に派遣され、1889年にはコールバックに伴われて米国に行き、オハイオウエスレアン大学、テネシーチャタヌガ幼稚園保母学校を卒業し、1894年に帰国して青山女学院附属幼稚園で教えている。6年におよぶ留学によって卒業生を幼児教育の専門家に育

てたことは、WFMSが幼児教育の重要性を痛感していたからだと考えられる。

#### 〈青山学院緑岡幼稚園の田村忠子〉

第6代院長の阿部義宗は、1933年の就任演説において真の基督教教育は根底から始めるべきだと小学校と幼稚園の設立を熱望した。その要請に応じて校友会長である米山梅吉は、1937年に私財をもって現在の初等部の前身である青山学院緑岡小学校を設立、小学校を青山学院が経営することは困難な時代であったので「青山学院小学財団」をつくり校名を「青山学院緑岡小学校」とした。海岸女学校の卒業生である米山の妻・はるは幼稚園を寄附したいと申し出て小学校と同時に開設された。園長ははるであったが、保育の責任者は青山女学院の卒業生である田村忠子であった。

田村は1897年に牧師の五女として生まれ、横浜の公立学園に入学、後に青山女学院へ転校、音楽学校受験の準備をして上野の音楽学校に入学したが、受給していた牧師の子弟に対するアメリカの実業家からの学費の援助が止まり、音楽学校は1年で辞めた。1920年に結婚して4人の男児に恵まれるが、貿易会社勤務の夫が不況のために減俸されたことから一念発起して職業婦人を志し34歳で玉成保母養成所に入学、1年後に総代で卒業した。その後、神田三崎町教会附属幼稚園の保母をしていた頃に緑岡幼稚園のことを聞き、阿部院長を訪ねてその任に当たらせて欲しいと頼み、恩師であった阿部君子夫人の口添えもあり、主任保母への起用が決定した。緑岡小学校はキリスト教主義の教育は出来なかったが、緑岡幼稚園で田村は理想とするキリスト教保育を実践した。

しかし、1944年4月19日、東京都より休園命令が出され、緑岡幼稚園は5月15日に休園式を行った。「戦時託児所」として保育を継続した幼稚園もあり、田村は保育の継続を願ったが実現しなかった。休園から1年後、1945年5月25日の空襲によって緑岡幼稚園の園舎は焼失した。敗戦となり、田村は戦後院長になった豊田實を訪問し、幼稚園再開を懇願したが聞き入れられなかった。

ところが、幼稚園再開の手続きを進めていたことを示す資料（理事会記録、設置認可指令書）が130年史編纂時に発見された。1950年5月19日の常任理事会において豊田院長から「戦時中疎開及戦災により園舎焼失のため閉鎖して居りました幼稚園を此度復活致したい」との提案があつて承認、6月23日の臨時理事会で幼稚園の復活設置の承認と豊田院長の園長兼務が可決された。9月2日付で渋谷区長宛に「青山学院幼稚園設置再開認可申請書」が提出され、1951年4月3日付で正式な「認

可指令書」が交付された。再開の見通しの立った幼稚園だったが、1949年開学の大学と1950年開学の女子短期大学に入学した多数の女子学生のための寄宿舎整備の要望が高まり、幼稚園舎と女子学生寮のいずれかを優先すべきという議論が表面化した。結論的には、大木理事からの「大学には現在300余名の女子学生が居り優先的に考慮されたい」という意見により廃園届を出すことに決定。緑岡幼稚園は再開されず、その後、院長となった大木の経営方針によって、1961年、新たに現在の「青山学院幼稚園」が設置されたのであった。

#### 〈おわりに〉

海岸女学校幼稚園の保育者であった高野はミス・ツルナーの導きによって桜井女学校で学び、ミス・ミリケン の指導を受けて札幌のスミス女学校附属幼稚園の保育者となり、海岸女学校幼稚園に招かれた。高野、濱田ともに宣教師の導きによって高い教育を受けて保育者となったことは、日本においては女子教育だけでなく幼児教育が大変重要であることを各教派の女性宣教師たちが痛感していたからであろう。この時期、資格を持つ保育者の確保には宣教師たちの教派を超えた協力があつたと考えるが、この点は今後の課題としたい。青山女学院幼稚園（海岸女学校幼稚園）は「文部省訓令第12号」と「幼稚園保育及設備規程」の影響によって閉園を余儀なくされた。再開できなかった理由はキリスト教教育が出来なくなったことで園舎建設や環境設備に必要な援助がWFMSから得られなかったためと考えられるが、この点についても宣教師の報告を読みこんでいきたい。

緑岡幼稚園については、これまで戦況の悪化による東京都の通達によって休園、空襲によって園舎は焼失して戦後も再開しなかったとされてきた。しかし、本研究において、1950年、青山学院内に幼稚園を設置再開しようとする計画があったことが確認できた。結果として、理事会において幼稚園ではなく女子学生寄宿舎を優先すべきと意見を述べた大木理事が後に院長となり、自らの経営方針のなかで新たに幼稚園を設置して園長となった経緯を明らかにすることができた。

---

## 早稲田奉仕園の活動とベニンホフ

原 真由美

### はじめに

昨年2020年10月に行われた早稲田奉仕園スコットホール献堂100周年記念シンポジウム「若き日の出会い 杉原千蔵と早稲田奉仕園一創設者ベニン

ホフ宣教師と1920年前後の青年たち」でパネラーを依頼された。筆者は創設者ベニンホフと早稲田奉仕園について担当をしたが、本稿は前述のシンポジウムのための研究から発展させ日露戦争後の社会構造の変革の時期にあつて、どのような経緯からアメリカン・バプテストが日本の新しい時代の要請に応える形で新しい伝道活動に参加していったのか、早稲田大学はキリスト教の一教派であるバプテストと連携して早稲田奉仕園という活動拠点を設立していったのかを、アメリカン・バプテストの年次報告書Japan Baptist Annual、GLEANNINGSおよび「基督教報」に記載された早稲田奉仕園の報告書の資料を用いて1907年の創立時からスコットホール完成の1922年の時代を中心に考察していく。

### 1. 早稲田奉仕園創立者 ベニンホフ・ハリヤー・バクスター (Benninghoff Harry Baxter) の略歴

1874年4月8日ペンシルバニア州ベナンゴ郡で父ルイス・ネルソン、母メリー・マックリントップの五男一女の長男として生まれる。

#### (1)ベニンホフの召命観

1892年インディアナ州ヴァルパライソに移住、師範学校に通い、その後同州の学校で教える。1896年フランクリン・カレッジに入学し、1914年名誉神学博士を取得。

#### (2)東洋への伝道の決意

1900年の夏期キャンプ、学生YMCA 夏期学校において宣教師を志す。アメリカン・バプテスト海外伝道協会 (American Baptist Foreign Mission society) の外国伝道宣教師となる。

1901年クラスメートのトロットイ・M・メレル (Trottie M. Merrell) と結婚し、妻を伴ってビルマに赴任する。しかし、1904年にメレル夫人の体調不良により帰国する。帰国後、1906年にシカゴ大学 (イリノイ州) で教育学士取得、1907年にシカゴ大学でM.A.を取得し、東京学院 (東京牛込佐内町) で教鞭を執るために日本へ赴任する。1941年に太平洋戦争勃発による日米の情勢により帰国を余儀なくされるまで早稲田奉仕園に奉職し、帰国後はフランクリン大学にて宗教部長として働く。1949年75才で天に召される。

A.B.M.U- Missionary Register.

Missions Magazine Jan 1935.

BIOGRAPHICAL SKETCH-REV. H. B. BENNINGHOFF

### 2. 着任時の日本の状況 (背景)

(1) 着任時の1907年の日本は、日露戦争に勝利し

資本主義が形成され始め、農村から都市への人口移動という社会構造の転換が起こり、これに伴い労働問題や生活不安と困窮やそれに基づく社会問題が起こっていた。

農村から東京を中心とした都会へ人口の流入が生じていた。その中で、新しい政治、経済の構造が、新しい教養をもった人々を必要としていった。土地に縛られない財産の所有が可能になる中産階級と呼ばれる社会階級層が大都市に出現する時代となった。

隅谷三喜男『日本の社会思想—日本の近代化とリキスト教』東京大学出版会 p.51,52.

## (2) アメリカン・バプテストの日本理解の背景

日露戦争に勝利を収めた後の日本の首都東京は、キリスト教に対する日本の国民感情の変化(三教会同)があり、海外伝道の拡大のためにアメリカン・バプテスト宣教師同盟 (ABMU) は伝道の効率化を図るため成果を挙げなかった従来の農村の伝道方式の変更の必要を求めている。

日露戦争後の東京は、文化、教育の中心となり多くの青年男女が将来を信じて教育を求めて上京しており、日本人以外にも勉学のために多くの中国人、フィリピン人、インド人が祖国を離れて来日するという背景をアメリカン・バプテストも知り得ていた。

明治初期から日本に伝道をしていたバプテスト派であったが、他教派に比べ教会と呼べる会堂も少なく、東京の中心部のバプテストの活動拠点にふさわしい会堂、センターを持つことでバプテストの影響を強くおぼせたいと願っていた。

GLEANINGS 1907.

1907年6月に開催されたバプテスト宣教師の総会である有馬宣教師会議で、日本バプテスト宣教師団が9月には女子学寮の実現、東京に就学のために上京する少女たちのホームの必要性が説かれ教育の中心地に於ける6カ所の学生寮、ホームが求められ、キリスト教の良い影響のもとに住まわせ伝道の機会を得るための東京拠点のセンターを建設する計画が諮られた。

## (1) 早稲田大学の事情—第2の発展期に向けて

1907年(明治40)年、早稲田大学は東京専門学校として大隈重信により創設され25年目の節目の年を迎えていた。私学のために弾圧や徴兵猶予の特典が受けられないなど苦勞もあったが、全国からの新しい知識を求める学生が大挙として押し寄せ第2の発展期に向けて大きく舵を取り始めようとしていた。若き日の大隈が長崎で宣教師フルベッキから「聖書」や「アメリカ独立宣言」を学んだ経験もあり大学にはキリスト教に理解のある

リベラルな考えのある教職員も多くいたことからキリスト教の倫理観をベニンホフのような宣教師の働きに解決を求めようとしていた。

『早稲田奉仕園100年史』

## (2) 安部磯雄との出会い

安部磯雄(1865—1949年)は、初代の早稲田奉仕園理事長として「奉仕園の父」とも言われているが、同志社大学出身のキリスト教社会主義の思想の持ち主で早稲田大学の教授であった。その著書『社会主義者となるまで』の中で「人道主義によりて将来社会主義者となるべき素地を与えられて居た」と述べているが、キリスト教の信仰と社会主義が自身の心に分かちがたく融合しているという考えの持ち主であった。

ベニンホフは、1908年12月、バイブルクラスで教えていた学生G.三浦という学生から安部磯雄教授を紹介される。学生の道徳と精神的状況が問題となっていることに話が及び、その時の学生の状況を改善する活動に進んで協力したいと感じていた。そして教師として早稲田大学に採用される。ベニンホフの意向に沿い宗教心理学科の開設が発表されることになった。9月から週2回、哲学科の4年生むけに「宗教の哲学的領域と起源」「諸種の宗教経験」「宗教的信仰の機能と本質」について教えることになった。

GLEANINGS 1909.

アメリカン・バプテストは、早稲田大学については東京の将来的な伝道に大きな可能性を見出していた。大学の規模においては国立に次ぐ学生の人数、宗教科目の採用を許可する自由を尊重する開かれた大学であり、1910年には早稲田大学基督教青年会が組織され、その集会に多くのクリスチャンがすでに入出入りし参加している事、早稲田大学に信徒を含め300名のクリスチャンがおり、教授陣の中にも10数名のクリスチャンがいることからこの状況を絶好の機会と捉えていた。

GLEANINGS 1911、1912.

やがてベニンホフは、早稲田大学からは社会活動、宗教活動を依頼され、大学の学問的な教育活動を補足し、学生達の余暇の時間の一部分を宗教的、それに関係する社会活動について学生の関心を引くことに努める。奉仕園の拠点の活動が福祉活動、宗教活動として明記されているが東京拠点を中心とした社会教育、社会福祉のセツルメントとしての事業の展開も期待されていた。

当初、東京学院と早稲田の学生寮の責任を担っていたが、その重責から健康を損ない、3ヶ月の休養を要し、東京学院の働きを辞任する。高等教育機関での使命を感じていたベニンホフは早稲田

の学生寮の働きに専念したと考えられる。その後、東京学院は閉校となり、中学関東学院として横浜三春台に新たに創立された。GLEANINGS 1912. 関東学院史資料室資料

### 3. 早稲田奉仕園の名称に見るベニンホフの理念と活動について

(1) 早稲田大学近くに1908年に創立された友愛学舎(1911年落成)を中心とする拠点を早稲田奉仕園という名を用いて1918年のGLEANINGS 1月号の報告に載せている。その理念は互いに愛すること、仕える人となること、奉仕の心から学生達に道徳的、精神的な涵養を目的とし、何よりも自主性を重んじていた。

#### (2) 自由と責任

信仰による生き方として、義務や人に迷惑をかけない生き方にとどまるのではなく、積極的に自ら良い決断を行う生き方を説いており活動の特徴としては次の様であった。

##### 1) キリスト教教養課程

人材育成 聖書研究、社会活動、日曜の礼拝を通じて学生たちに直接福音を伝えた。特徴的なものにキリスト教教養課程がある。キリスト教教養課程は学寮の中心的な教育の中に弾力的に取り入れられ、3年で終了するコースで修了者には証書も授与されている。

##### 2) 聖書文書の研究、毎週の討論。

聖書の研究(マタイ伝、使徒行伝、パウロ書簡、旧約聖書)、毎週の討論会を行い、クリスチャン有名人の講演会。夏季学校。宗教的な主題を取り上げた本の読書会を開いている。例としては人種差別と不正に反対した20世紀のバプテストのリベラルな神学者リバーサイド・チャーチ牧師、ハリ、エマーソン、フォスデック著の本 *Fosdicks' Manhood of the Master, Anderson's The Man of Nazareth, and The life of Joseph.* など社会的福音運動=ソーシャル・ゴスペルに関係する本を学生たちと学んでいる。

### 4. 国際人としてのベニンホフの外交と日米交流

1) 1927年から外交官勤務として太平洋戦争が勃発するまでホッジ将軍の政治顧問で外交官として勤めた。「N.Y Times, 1946」

2) 米国への文化使節としての派遣—1934年9月-1935年7月 目的は早稲田奉仕園の事業への財政的支援と日本の文化を紹介するために15の州、84の都市、250回の講演を行っている。

「早稲田奉仕園」43号1935年

##### 3) 早稲田国際学院の設立

早稲田大学に入学予定の海外で生まれた日本人、外国人のための入学準備教育を提供し、日本

文化の知識を授ける。日本人とアメリカ人学生との友好関係を促進させ、日本文化を紹介するために文化使節として渡米し、早稲田大学とアメリカの大学の1年の奨学生制度を作り日米交流のきっかけを作った。

資料「基督教報」昭和10(35)年1047号

### まとめ

日露戦争後の日本の社会構造の変化や私学教育への必要性が高まる中、早稲田大学に多くの学生が全国やアジアから集まりこの時の社会背景をアメリカン・バプテストの方針と早稲田奉仕園の状況から概観してみた。

ベニンホフの活動は、キリスト教の要素に基づいた、宗教教育であり、社会的、宗教的活動として、学生をキリスト教の家庭的な環境下のもとでクリスチャン達の支援を受けつつキリスト教信仰に基づいたカリキュラムやプログラムからキリストの品性を身につけ国際的視野を持ち、他者と共に生きる人間の形成をめざしていた。

初代理事長の安部磯雄の人類愛を中心においた宗教と社会主義が融和しているという教育観やエキュメニカルな信仰とも通じ、ベニンホフ自身の経験に基づくリベラルで国際的視野に立つ影響もあったと考えられる。

キリスト教の信条や教義をこえて国際的な出来事や国内外の生活に影響を与えている問題に対して答えを求めてやってくる学生達に、聖書研究、著名なキリスト者の講演活動、社会的福音伝道から当時の学生の運動家精神に刺激を与え、人類に融和感情を国際交流などで献身的な奉仕活動に参加するという将来像を次々に提示していった。その活動から社会を変革する多くのクリスチャンも生まれていった。

キリスト教社会主義運動に関係する活動が弾圧を受けた影響からか奉仕園の初期の活動の資料が少なく、詳細が明らかになっていない点もある今後新しい資料が掘り起こされる際に、その側面の検証をはかることを今後の課題としたい。

付記 本稿は2021年9月10—11日にWeb開催された「キリスト教史学会第72回大会」で発表した内容に加筆・修正したものです。

### 【横浜プロテスタント史研究会役員】

代表 岡部一興、会計 中村早苗、H.P. 園木幸夫  
役員 熊田凡子、中島耕二、花島光男

※辻直人氏、事情により役員を辞任しました。若い方に役員になって頂きたいということで、役員会に諮った結果、近藤喜重郎氏に4月から役

員をお願いすることになりました。宜しくお願  
いします。

## 海老坪先生を追悼する



大島 良雄

海老坪 真先生は  
1925年6月28日神奈川県に生まれ2021年7月  
14日96歳で天に召された。先生は関東学院中  
学部在学中、後に  
フィリピンで殉教死さ

れたアメリカン・バプテスト同盟の宣教師 James Howard Covell コベル先生の薫陶を受けた。中学部卒業後陸軍の航空隊の下士官として兵役に服し、特攻隊員として出撃を待機中に終戦になった。戦後彼は日本基督教神学校に学び京都のバプテスト教会の伝道師として牧会に従事した後、恩師坂田 祐院長に招かれ関東学院中学・高等学校の宗教主任・聖書科の教諭に就任した。伝道活動に熱心であった坂田院長により学院の援助を得て学校での働きに加えて磯子の自宅を磯子伝道所として活動を開始し、後にそれを磯子教会とするに至るまでに発展させた。教師、宗教主任、それに加えて開拓伝道の責任者と云うのは二人、三人分の活動を一人で担うような過酷なものであるが、彼はそれに耐え立派な業績を残した驚異的な活動家であった。

彼はまた横浜プロテスタント史研究会の誠実なメンバーとして研究を怠らなかった。彼が特に研究したのは関東学院中学部の生徒であった時に教えを受けた宣教師コベル先生についてであった。コベル宣教師の平和主義は当時の軍国主義の日本国策に反する危険な思想として排斥され、日本での活動が許されなくなり、フィリピンのパナイ島イロイロ市のバプテスト派の大学に転任した。やがて太平洋戦争が勃発しイロイロに進駐する日本軍を避けて山中に避難していたが発見され1943年12月20日彼ら夫妻を含めて11名のアメリカン・バプテストの宣教師ほか数名が斬首され殉教死した。

海老坪氏はコベルの遺徳の検証する為に、現地を訪ね、現地の人たちと親交を結び研究を深め、平和主義を鼓吹した。日曜学校の児童の為に2017年6月にはコベル先生を顕彰する紙芝居を作成した。もう一つの研究は恩師坂田 祐先生についてであった。彼は中学生の時から身近に先生に接し、

教師として就任した後も特別な期待をかけられ伝道所での活動を託されるまで信任されたが、彼もまた絶大な信頼を院長に寄せ、其の足跡、信仰を顕彰することを願った。分かり易い形で両先生の功績を伝える為に、2017年6月に「物語風 コベルの生涯」、2018年12月に「物語風 坂田 祐見聞録」を出版した。

彼は晩年書物その他多くの家財を整理した時、宝として残したものはコベル先生が学院の廊下に掲げていた「国家の政策として米国、仏国、日本、英国、ドイツなど15ヶ国が1928年に締結した不戦条約」の一部であった。彼がある時この額を2つ学校の物置で発見し、校長に交渉しその一つを貰い受け、家財や書籍を整理した後、唯一の家宝として残したものである。その不戦条約に彼が見たのは、その額を掲げたコベルの平和主義と殉教死を遂げた彼ら夫妻の信仰と信念であったと推測する。(元関東学院宗教主任)

## 関東学院建学の精神を貫いた 海老坪真先生を偲んで

花島 光男

海老坪真先生が逝去された。96歳であった。2021年7月22日、ご子息の海老坪信生氏よりメールで訃報の連絡があった。添付の文書では、晩年の病気の事、21年5月以降の病状が詳細に記されてあった。度々の入院を繰り返しながらも洋光台のアパートでの生活にこだわり、老人施設への入所を渋っていたが、自らの健康状態より入所を決意し、その準備を始めていたところであった。しかしながら入所を目前に、6月18日入院、コロナ禍では家族の面会も困難であったとの事。7月5日、病院を退院しホスピスに移り、当初は意識もあり会話もあったが、間もなく意識薄れ、7月14日早朝、医師より死亡が告げられ、葬儀は21日に親族のみで行ったと記されてあった。

私が先生より6月14日にメールを受け、坂田先生関係の写真や文書があり、これを取りに来てほしい旨記されており、翌日訪問、段ボール箱を受け取り、しばらく話をして帰った。すでに施設入所前で、部屋は整理され何もなかった。部屋の中を動くことも苦痛であるように感じた。おそらく先生と最後に会ったのは私であろう。

私が初めて海老坪先生に会ったのは関東学院に勤めた時、1966年であった。当時の関東学院中高は圧倒的に男性教員が多かった。しかも母校関東学院の卒業生が多く、特に第17回、1940(昭和15)年卒、から、22回、1945(昭和20)年卒に集中している。



海老坪先生は1943年卒、卒業生教員集団のほぼ中心であった。中高の宗教主任として、毎日の礼拝、様々の宗教行事、式典、教科としての聖書科授業などすべてを担当していた。キリスト教学校教育同盟の教育研究委員会（教研委）の委員として全国のキリスト教学校のキリスト教教育担当者との人的交流も多く、関東学院のキリスト教教育にも大きく貢献した。

少しずつ後退してゆくキリスト教教育を護るために、独り孤立しても常に厳しく発言し続けた姿を印象深く思い出す。

海老坪先生の宗教主任としての気持ちと働きは、自らの体験を記した著書から読み取れる。戦後復員し母校三春台近くを歩いた時、偶然に坂田祐院長に会い、当時庚台の自宅で行われていた聖日礼拝に誘われ出席した。これが決定的な体験であった。これより牧師への道を歩み、関東学院で中高の宗教主任、さらに坂田院長の支援で磯子の丘教会も設立した。坂田院長による関東学院教育の建学の精神を生涯貫き通した。それゆえに関東学院の創立について1984年に、学院理事会が35年遡らせて、1884年を創立としたことには、疑問を呈し神奈川新聞に投書、その文章は100周年記念式典当日の神奈川新聞に掲載された。

関東学院への思いは強く、自ら2冊の著書を自費出版した。

『物語風 コベルの生涯』2017.6. 28

『物語風 坂田祐見聞録』2018.12. 16

いずれも学術研究書ではなく、市販されずに知人、関係者に配られた。すでに戦争当時を知る生き証人はなく、海老坪先生の貴重な証言となった。坂田祐は若い時から克明に日記を書く習慣を持っていた。しかしながらその日記の解読は、極めて困難である。坂田創氏により解読が進められ、関東学院大学キリスト教と文化研究所の研究紀要に毎年少しずつ報告されてきたが、坂田創氏も亡くなり、研究所の研究員が読みにくい文字に取り組み解読作業を続けている。当初海老坪先生はこの作業に参加されていなかったが、中途より加わって下さり、当時の生徒として坂田先生の状況を知ることから、解読作業が進んだ。

2019年の関東学院中学校高等学校創立100周年までは、生きていたいと言っていた。そして100周年の記念礼拝で説教された。更に2020年には、元関東学院資料室の外崎さん、同窓会関係事務葛城さんと共に坂田家の跡を探しに足尾銅山を訪ね、関係の場所を見に行きその報告会をした。今回はその時の写真を提供していただいた。きっと100歳まで生きたかったでしょう。自らの軍隊と戦争体

験より、反戦平和を訴え、さらに戦争責任問題等に深く関心を持って資料等を収集整理された。また、バプテスト教会よりソ連、北朝鮮を訪問したこともあった。

命日7月14日はパリ祭、フランス革命記念日である。海老坪先生の生涯をこの日が記念し象徴しているような気がする。

## 海老坪 眞先生を偲ぶ

岡部 一興

海老坪先生と出会ったのは、1981年9月横浜プロテスタント史研究会が初めて開催された時だったと思う。先生は、横プロ研の最初からの会員だった。ほとんど毎回例会に出席されていた。ここでは、横プロ研でのことを中心にその足跡を辿ることにする。1984年12月15日、第37回の研究会において、「関東学院設立 C.B. Tenny の生涯」のテーマで発表している。テンネーは、1900（明治33）年10月22日来日、彼は優れた教育者であった。日本バプテスト神学校を東京学院の高等学部に結び付け、東京学院の中学部を閉鎖、中学関東学院を横浜に設置、東京学院の高等学部を関東学院の組織に組み入れ、関東学院の発展に尽くした。海老坪先生は、後に太田愛人遍『外人墓地に眠る人びと』（キリスト新聞社、1988年）の中で、「神学教育と関東学院の礎—テンネー夫妻の使命感と闘志」という文を書いている。そこで、皆さん「天寧」という字を何と呼びますかと問いかけている。「テンネー」と読むのです。チャールズ・B・テンネーは、自分の名を「天寧」と称し印鑑や自宅の門標に表記していた、それほど日本を愛していたと教えて下さった。

第2回の発表は、2014年5月17日の例会で、「坂田祐院長と関東学院50年—坂田院長からプレゼント」の題でお話下さった。「坂田祐の家系」、「足跡」、「私と院長との間での得難い体験、プレゼント」の順で述べた。

1945年「大東亜戦争」敗戦後、朝鮮平壤から復員、関東学院と霞ヶ丘教会の焼け跡に立ち、そして久保山の坂で院長にばったり会い、「海老坪君だね」と声を掛けられた。それ以後坂田から受けた恩恵が5回あったと言い、それを述べた。その一つは、院長から内村鑑三著「伝道の精神」を伝道者になるなら5回読め、ならなければ返本せよと言われた。これが大きなプレゼントの一つであったと言われる。

第3回目は、2017年11月18日、第396回の例会では「コベルの生涯」であった。同年6月28日、『物

語風 コベルの生涯』(燦葉出版社)から刊行し、これに基づいて発表された。この書を書く契機となったのは、コベルに直接教えを受けた生き証人の一人であったことにより、2016年9月「朝日新聞」に掲載されたのがこの書を執筆することになったと告白している。コベルがフィリピンで20カ月間共同生活をした場所を訪れ、そうした調査に基づいて書いたものである。1943年に虐殺されたことについては、大島良雄先生がお書きになっているので、ここで筆を留めたい。

第4回目は、2019年3月16日に「物語風 坂田祐」の題で発表して下さった。2018年12月16日付けで、燦葉出版社から『物語風 坂田祐見聞録』の書を出版、この書に基づいて発表して下さった。先生は、友人から「コベルを書くだけでなく、坂田院長の本を出したらどうかね」とのアドバイスを受けてこの本に取り掛かった。この時、先生は93歳であった。実に詳しく坂田祐について述べ、1969年創立50周年記念の日、グレースセット記念講堂で語ったことを説明して下さった。そしてこの45日目に召されたのであった。海老坪先生は、いつも横プロ研のことを覚えて下さり、熱心に例会に出席されていた姿が目に焼きついている。愛する坂田祐先生を越えて95歳で召された、関東学院を卒業され、1956年関東学院中学・高校の宗教主任に就任し、77年2月日本バプテスト同盟磯子の丘教会を設立95年3月同教会を辞任するまで教会に仕えた。先生は走るべき道を走り、天に召された。主のために働いた先生のことを覚えたいと思う次第である。

## 島田貫司氏を偲んで



海野 涼子

島田貫司さんが2021年5月4日天に召された。亡くなる四日前にはお元気な声で電話でお話したばかりでしたからその時は本当に信じられない思いでした。まだまだお元気でいて欲しかったし、本当に惜しい方を失くしてしまったのだと心から悔やまれてなりません。今はひたすらご冥福をお祈りするばかりです。

島田さんのイメージは、お仕事が旅行会社(トラベラーズ)の旅行プランナーとして、また添乗員というお仕事柄かもしれませんが、何事にも熱心で、思い立ったらすぐに実行に移されるタイプで、いつもはつらつと活躍されていたお姿が

印象的でした。

私が横浜プロテスタント研究会で「エステラ・フィンチと軍人伝道義会」という表題で初めて発表をさせて頂いたのが2001年3月のことでした。まだ会員にもなっていない全くズブの素人の私を皆様から温かく迎えていただき、とに角アカデミックな雰囲気の中で無我夢中で発表させて頂いたことは今も忘れることが出来ません。その一、二日後に、突然島田さんからのお電話でご自分も横浜プロ研の会員でフィンチのことについて二、三の質問をされたのですが、それが島田さんと交わした最初の会話でした。

翌二〇〇二年六月十六日はフィンチ女史の命日に当たり、この日は特にフィンチを顕彰するための「マザーオブヨコスカ顕彰会」を発足する記念すべき日として、クリスチャン新聞記者の取材もあり、阿部志郎先生(神奈川県立保健福祉大学名誉学長)や、アメリカ人を含む牧師三名、米国アナポリスの米海軍兵学校からの留学生一人も加わり計三〇名が集まり、横須賀市の曹源寺で墓前会と親睦会が持たれました。島田さんも積極的に準備のお手伝いに加わり、この日を皮切りに決まって六月は毎年欠かさず「墓前会」と「偲ぶ会」にも鎌倉から横須賀まで少しも厭わず毎回出席されるようになり、二〇一九年までそれは続きました。その熱意には頭が下がるほどです。

島田さんはまた非凡なアイディアマンでもあり、ヘボン博士夫妻や井上成美大将の葉を始め、フィンチの葉も「帰化してまで日本を愛した宣教師・星田光代」という文言で印刷して下さった時には、少なからず驚いたものです。これも島田さんのアイディアによる「目で見る伝道風景」と言ってもよいファイル作りで、ご本人が参加した記念すべき行事の写真をアルバムのようにA4用紙に貼り付けしたファイルを持ち歩かれ、会う友人にファイルごと差し上げていました。これはなかなか出来ることではないと感服しておりました。

ある時、我が家で眠っていた奥野昌綱牧師肉筆の立派な掛け軸が一幅見つかりました。広げて見ると奥野師から弟子だった我が祖父、黒田惟信へ贈られたものだと分かりました。筆墨で立派に書かれた新約聖書のみことば(第一テモテ六:一二)「信仰の善戦をた、かひ永生を取べし爾これが為に召を蒙りたり又多の人の前にて善證をなしたり。奥野昌綱七十八歳」でした。

早速島田さんのアイディアで明治学院大学資料館に贈呈してはどうかと言われました。長い間眠っていたとは思えないほどよく保存されていました

から贈呈が叶うなら申し分ないと思いました。我家にとっては家宝といえませんが、明治学院大学資料館で永久保存できればそれこそ果報と思いました。島田さんがその労をとってくださったことは言うまでもありません。

最後に島田さんに誘って頂いた「ダイヤモンドプリンセス号」の雄大な船旅の思い出は一生の良き思い出となったことです。お蔭様で私達夫婦はこの船旅を通して素晴らしい方々とお友達になり、現在も交流できますことは、一重に島田さんのお力の賜物と今では心から感謝の気持ちでいっぱいです。コロナ禍が完全に終息したら、又きっと島田さんなら「船旅是非行きましょう！」と誘ってくださるに違いないし、あの元気なお声が今でも聞こえてくるようです。

島田貫司さん、本当にどうもありがとうございました。どうぞ神様の御許にあって安らかに眠りください。

## 島田貫司さんとの思い出

中島 耕二

島田さんの名前を知ったのは、遙か半世紀も前のことでした。明治学院大学剣道部の一年後輩が島田さんの勤める旅行会社に就職したことから、この後輩を通じて島田さんの名前を知ることになりました。しかし、島田さんと会って話を交わすようになったのは、もう少し後になってからでした。ところが、それがいつであったのか思い出せません。1991（平成3）年に高谷道男先生の「100才のお祝いの集い」があり、司会をされた島田さんといろいろ話をした記憶がありますので、最初に出会ったのはこの時より前のことであったと思います。

島田さんは学年で9年先輩、恰幅も良く、かなり派手目の服装を好み、顔も若干いかめしく、そして大きめの金の指輪が光っていて、それらしき条件が整っていましたので、いささか敬遠気味でした。しかし、いざ話をしてみると先輩風は全くなく、優しさに溢れ、顔は人懐っこい笑顔に変わり、まろやかな声で対応してくれました。このまろやかな声はグレゴリーバンドのOBであったことで納得できました。そして発見出来たのは、島田さんは誰にでもいつの間にか親しい間柄にしてくれる不思議な魅力を持った人ということでした。その背景には信仰深いクリスチャンとしての寛容な心がありました。

島田さんとは主に明治学院同窓会や本研究会を介して長い間交流を戴きましたが、ある時、私が調べていた戦前の明治学院卒業生で学院理事を務

めた伊藤毅氏が島田さんと親戚であることがわかり、いろいろ資料を戴いたりして個人的な交流も深まっていきました。島田さんと頻繁に情報交換をし合うようになったのはここ20年のことで、この間、ほぼ定期的にヘボンや宣教師についての問い合わせや近況報告の電話が鳴り、Walter K. Shimadaのゴム印の押された明治学院、ヘボンやS・R・ブラウンなどに関わる諸々の情報、国内外の旅行のパンフレットなどが短いながら温かいメッセージとともに送られてきました。また、いろいろな会合で顔を合わせた後には、かならず数枚のスナップが自宅に届きました。

ある日、島田さんの幼馴染である方の娘さんが、私の住む東京目黒区から区議会議員に立候補するので是非応援を頼むという電話がありました。その区議候補は、父親のような年齢の島田さんを「貫ちゃん」と呼び慕っていました。

近年は明治学院同窓会東湘南支部の集会で講演を依頼されたり、旧横浜居留地39番のヘボン記念碑の清掃案内、私の方からは海外旅行の手配をお願いしたりしました。最後に残念であったのは、2年前にスペインのサンチアゴ・デ・コンポステラの巡礼旅行の手配をお願いし、現地の情報をたくさん戴いていましたが、コロナのためやむなくキャンセルしたことでした。もうひとつ、随分前に「エルサレムに行きたい」と話した時に「ツアーを組むのでいつでもOK」と言って戴いたのに、お願い出来なかったことです。

今夜も「貫ちゃん」から、あのまろやかな声で電話が架って来る気がして仕方ありません。

## 島田貫司氏追悼

新倉 勢子

島田貫司氏と初めて会ったのは2010年4月17日だった。明治学院同窓会東湘南支部の会合で、横須賀軍港巡りが企画されていた。軍港巡りに魅力があったのか、同窓会としては多数集まり、支部長の島田氏が、来賓や新来会員の紹介などしても聞こえないほど、会場のアジアレストランは満杯だった。

次の集まりの時に、島田氏は一人一人にチラシを配った。裏には氏が案内した旅行の記念写真がコピーされていた。旅行社に勤める彼は、人の集まる場所には常にチラシを持参していて、ここぞという時に、漁師のように漁網をばあっと投げる。その網に引っかかった魚は、いつのまにか彼の手中に収められてしまう。私もその網にかかった魚の一匹だ。

ヘボン博士の墓を訪ねる企画と日程の案内だっ

た。その頃明治学院では卒業生を対象に、ヘボン講座というプログラムが開かれていて、ヘボン博士、島崎藤村、賀川豊彦の三大先人についての講義があった。中島耕二先生からヘボン博士について学んだのはこの時だ。ぜひヘボン博士ゆかりの土地を訪ねたいとの思いが強まった。2011年9月、東日本大震災の後であったが、私たちはアメリカニュージャージーへと旅立った。プリンストン大学、ヘボン博士夫妻の住居、ローズデイル墓地などを訪ねた。それがきっかけで、その後も島田氏に船旅に誘われて、二回参加した。

横浜プロテスタント史研究会があるからと、横浜指路教会に連れて行ってくれたのも彼だった。彼は人と人の出会いを結びつける、いわばつなぎの名人であった。2019年12月15日、私は島田氏の運転手として、井上成美海軍大将の追善供養の集まりに出向いた。横須賀の荒崎海岸近くの勸明寺だった。井上海軍大将の命日に、かつての英語の教え子たちが集まり、やはり教え子だった住職の読経を聞き、思い出話をしたり、大将の生前の肉声をテープで聞いたりした。最後に英語の歌「オールド・ブラックジョー」を大合唱した。翌朝の神奈川新聞に、その記事が写真と共に載った。

写真には島田氏と私の後ろ姿が写っていた。島田氏は著名人や様々な会との付き合いや義理にも堅かった。

彼は毎年10月、横浜山下町にあるヘボン博士の顕彰碑を清掃することに、使命感を持って行っていた。また老人ホームのおむつを畳む奉仕、鎌倉駅周辺や海岸の清掃、花を植える奉仕など、まさに“Do for Others”を実践する人だった。

明治学院同窓会東湘南支部は、島田氏が支部長に就任した2004年から2019年まで一度も滞ることなく、毎年支部会を続けてきた。彼の急逝によって、後に残された私たちは今、水を失った魚同然だ。

きっと最後の審判で「よくやった。お疲れさま」と神様から労われて、彼は悠々と天国への門を切り抜けたことだろう。

### 【研究発表リスト（その43）】

- 第419回 2019.12.21 辻 直人  
「1930年代のキリスト教学校と国家主義—明治学院と同志社の事例から—」会場：横浜指路教会1階会議室
- 第420回 2020.1.18 原 真由美  
「太平洋戦争後のアメリカの日本への宗教政策—バプテスト宣教師D.C.ホルトムの影響—」  
会場：横浜指路教会1階会議室
- 第421回 2020.2.15 中島 耕二

「横浜指路教会第二代仮牧師・ジョージ・W・ノックス」会場：横浜指路教会1階会議室  
※2021年3月例会から9月例会までコロナ禍のため休会

- 第422回 2020.10.10 岡部 一興  
「『長谷川誠三研究—津軽の先駆者の信仰と事績—』 会場：横浜指路教会会堂
- 第423回 2020.11.21 吉馴 明子 (教会堂)  
「高知民権運動と北海道キリスト教共同農園」
- 第424回 2020.12.19 吉原 重和 (教会堂)  
「吉原重俊とS.R.ブラウン」  
2021年1月例会から9月例会までコロナ禍のため休会
- 第425回 2021.10.20 西 由香利  
「ヴォーリズの1930年代—近江兄弟社への改称から—」ズームで例会を行なった。
- 第426回 2021.11.20 中村 早苗  
「戦前のキリスト教主義学校に存在した二つの幼稚園とその保育者たち—海岸女学校附属幼稚園と青山緑幼稚園における幼児教育—」ズーム例会を行なった。
- 第427回 2021.12.18 原 真由美  
「早稲田奉仕園の活動とベニンホフ」  
教会堂で例会を行なった。
- 第428回 2022.1.15 服部 直美  
「植村環と戦時下のキリスト教—日本YMCA機関紙『女子青年界』を手がかりに—」教会堂で行なった。
- 第429回 2022.2.19 早矢仕 理宇 (ズーム)  
「無償・虚無・抽象—知性史の中のささきふさ」
- 第430回 2022.3.19 中島 一仁  
「鳥屋だいは誰か—女性初の日本プロテスタント信者を推理する」ズームで行なう予定。

### 【編集後記】

会報70号をお届けします。2021年1月から休会になっていた研究会を10月16日西由香利氏の発表を以って再開しました。この例会と11月の中村早苗氏の発表もズームで行ないました。12月の原真由美氏の発表は教会堂を使用して行ない、2022年1月の服部直美氏の発表も教会堂で行ないましたが、オミクロンの猛威により、2月例会の早矢仕理宇氏の発表は、ズームで行ないました。今後、できるだけ早い段階で、コロナが収まり対面での研究会ができることを祈るばかりであります。

去年の5月4日、横プロ研の最初からの会員である島田貫司さんが亡くなりました。また7月22日、海老坪真先生が天に召されました。貴重な会員を送りました。淋しい限りです。(岡部一興)